

相沢正一郎さんの語りには独特なものがある。それは、相沢さんが語ることによって、相沢さんの言葉によって、いままで見えていなかった世界がはじめて顕れる、ということだ。

相沢さんの語りは、この現実世界でおこっているあれこれの事象についての詳細やそれにもなう思索、自己表出や指示表示といった自己と他者にまつわるできごと、そういうものからなれて、相沢さんの言語によってこの現実世界とたもとを分かつことになったもうひとつの世界、それは、言語でしか踏み込めない世界が言語によって拓かれ、そこに未知の世界が顔をだし、言語にたいする愉楽を讀者が体験できるのではないかとおもっている。ほくらの世界には、現実的な具象以外に言語で形作られる世界があることをおしえてくれる。

相沢正一郎さんの新しい詩集『風の本』（書肆山田）は30の節で構成されている。節ごとのタイトルはない。そのなかの最初の節と最終の節を転載する。

風が、五十七ページ目に漆の白い葉裏をまくりあげ、  
五十九ページにたんぼほの綿毛を飛ばし、六十ページ目に  
こがね虫を振り落とそうとリラの木をゆする。  
九十三ページ目の麦畑の上をやさしく吹く風が、そつと本  
からぬけたすと、くつを脱いで窓から忍び込む。……レ  
スのカーテンを泳がせながら部屋から部屋へ、あなたの名  
前を呼びながら薄目をあけてあるきまわる。  
やがて、風はひとさしゆびをなめてテーブルの上の本をめ  
くる。……さがしてる——あなたが何ページ目に隠れてい  
るか。

なきもの。たえしえなきもの。めでたきもの。くちおしき  
もの。うれしきもの。うつくしきもの。ありがたきもの  
……あつたな、そんなこと。ここにも——ねむい……いつ  
かの葉がわりのシャガール展の半券みたいに日々のペ  
ジのあいだに挟み込まれて……テーブルに突つ伏す。……  
きえてしまう、ここだった——千年経って、目覚めたとき  
には……。

このあいだには「28の物語」が展開されるのだが、それらの物語は、相沢さんの言語によつてはじめて懐胎され、この世に顕れるものだ、といつてしまつたら相沢さんびいきにうつるかもしれないが、相沢さんの描く世界はこの地表での現実的なできごとを超えて、言葉によつてはじめて顕れてくる世界だともうし、相沢さんの作品はいつもほくの想像力を刺激してやまない。

この詩集はサブタイトルに「枕草子」のための30のエスキス」とある。ぼくは『枕草子』を読んだことがないから『枕草子』を知っていたらこの詩集がより興行きを増すのか、それともそんなこととは無関係に、相沢さんなりの『枕草子』を書くための草稿なのだろうか。相沢さんには相沢さんなりの思いがあるのだろうが、このサブタイトルはなくてもいいとおもう。『枕草子』という既本名を出さずにただだに『風の本』としたほうがすつきりしたようにおもう。

では、現実のこの世界はどうなのか。

世界ではテロ、グローバル資本主義の横行、極端な貧富の

あかるい月の夜に川をわたる牛車の車輪にだけ散つた  
水晶のような水——その欄外にダンプカーが水溜まりの  
泥水を撥ねあげる。潮が干あがつて浅瀬に座礁したおき  
な船——そのすぐ近く、ゆすりあげた紙袋から歩道橋の階  
段をリングがひとつ転がり落ちる。節分のころの菖蒲の残  
り香、着物を取りあげると漂うたきしめた薫物、まわる車  
の輪にふつと舞いあがる蓬の香り——そんな行間にエレ  
ベーターに残っていたビツアの匂い……

硯に髪の毛が入っていたり墨に小石が入っていて墨を摺  
るときしぎし軋む……あつたな、そんなこと、ここにも——  
にくきもの……コートの袖口のぶらぶらのボタン。潔く  
われず、いびつになつた箸。紙バックの三角屋根がうまく  
剥けなくてギザギザになつてしまつた口から飲む牛乳の  
紙っぽい味。車窓で別れの挨拶をした後もなかなか出発し  
ない電車。自転車の買物籠に捨てられていた空缶。浴室の  
切れかかつた蛍光灯の瞬き。

ねむい……ページをめくるたびに涼しい風が顔にしみわ  
たり、まなざしは活字をさわつているものの紙面からこと  
ばが剥がれ、はなれ……おおあくび。黒板消しがチョーク  
の文字をけすように——萩の枝にむすんだ恋文も清涼殿  
もむらさきだちたる雲も方違えも烏帽子も雁の声も衣擦  
れの音もきえ、……冷蔵庫が唸る。バッテリーも植木も  
確定申告も生協も米櫃もフライパンも洗濯機もスマホも  
スカイツリーもきえ、……あたりが霞んでくる。  
ねたきもの。あさましきもの。むとくなるもの。おぼつか

差（富裕層上位62人と低所得者36億人の資産がおなじらしい。  
び、つくりぼんである）。日本では一億総活躍社会、軍事力の強化、  
手の施しようのない原子力、と想像力もへつたくれもない日々  
である。なぜこんなことに世界はふりまわされているのか、世  
界情勢に疎いぼくにはよくわからないことではあるが、産業革  
命以後、生産と成長が良しとされてきた価値観がすべての元凶  
のようにおもえてしまうのだが、ひとを説得させるだけの根拠  
を持つていない。それでも産業革命以後の世界観が現在のひず  
みをつくりだしているとおもう。とはいっても、ひずみのない  
賢人政治がつくりだす世界なんてあるはずはないのだから、い  
つの時代もそれぞれの病巣をかかえて臨床的な処方をついやし  
て、青息吐息で生き延びているにすぎないし、いつも世界は「こ  
んなこと」でふりまわされている。

そうはおもつていても、すこしは静かにしたらどうだろうか  
とおもう。たぶん、ぼくだけではないとおもうのだが、みんな  
「いまの状況」に疲れているとおもう。自分の全力を出して生  
きていかなければならない世界なんてほんとうは「違う」とお  
もっているだろう。活躍しなくてもいいから、軍事力を誇ら  
なくていいから、原子力に生活の豊かさを委ねなくていいから、  
経済的に豊かになるよりもつと「豊かな」ものがあるはずだ、  
とおもっているとおもう。いま一番必要なことは立ちどまって、  
自分とこの世界の関係の物語を自分の言葉で編んでみることで  
はないだろうか。

ともかく、一度立ちどまろう、一億総活躍社会などといわず  
に。宗教や経済や軍事力を声高に語るのをやめて、たちどまっ  
て、たまには川を見て、どぜうのことも考えながら。

どうしても

泥鰌は

どぜう

でなければ

なりません

ヨソユキの袴

一張羅の燕尾服

を着るように

泥鰌

なんて

漢字で

は

感じが

出ません

春の田舎の

へどろをかき混ぜて

ふっと

動きをとめ

水面を見上げる

ちよびヒゲの哲学者

泥鰌は

どろを吐かせて

どぜう

でなければ

なりません

どうして？

哲学せよ

みずから

八木幹夫さんの新しい詩集『川・海・魚等に関する個人的な省察』（砂子屋書房）から「どぜう」全篇。あとがきで八木さんは「今年も鮎釣りのシーズンがやってくる。魚が群れをなしてわたしという川を遡上する。胸がときめく。」と書いている。八木さんのこの一冊を読んでいると、人は、宗教や経済や利便さで生かされているのではないことがわかる。そういう世界のことをおもいながら詩は日々書き継がれている。

八木さんのこの一冊は、この現実社会の速度、物理的なスピードにかきまわされて「みんなが言ってるからきつとそうだろう豊かさ」を求めることに疲弊した人たちに、釣りでもしながら「わたしという川を遡上する」魚の群れをからだいっぱい感じてみたら、いまの生き方とは違う方法も見つけだせるかもしれないよ、と、そんなことをいつている。八木さんのように「胸がときめ」きたいものだ。